

## AOYUZU -Salon de Digital- 新春特別企画 講演概要

2023年1月25日開催「AOYUZU -Salon de Digital-」  
新春特別企画の講演概要をご紹介します。



コニカミノルタ株式会社  
経営管理部 DX推進グループ  
アシスタントマネージャー  
駕海 慶司氏

モデレーターとして、出光興産株式会社 執行役員CDO・CIO ICT推進部管掌 三枝幸夫氏を迎え、セミナーを開催。

「ITの内製化 デジタル人材育成の秘訣」と題して、コニカミノルタにおけるDXの取り組みについてご紹介いただいた。

### 【概要】

2020年から始まった新型コロナウイルス感染症の影響で社会は大きく変化し、特にデジタル領域の進化が進んだ。データアセットを活用し、データ収集にかかる時間を減らす必要もあった。コニカミノルタは中期経営計画で「DX2022」をスタートさせた。

「DX2022」では2つの事業ポートフォリオ転換を目指している。1つ目は、従来のオフィス事業の収益力を立て直すこと。2つ目は、従来のオフィス事業に代わる収益の柱を確立し、ポートフォリオ転換を実現することです。今後の柱として、インダストリー事業、ヘルスケア事業、プロフェッショナルプリント事業を成長させることである。

コニカミノルタはDXを「デジタルテクノロジーを使って業務改善のための組織およびプロセス改革」と定義付けている。同社の目指すところは、顧客体験を向上させることだが、そのためには従業員体験も同じように向上していくことが必要と考えている。その手段として、業務プロセスを改革し、社内文化も改める社内DXを推進していった。

業務の効率化を行うために、コニカミノルタでは2つのRPA、Automation Anywhere(AA)とPower Automate for Desktop(PAD)を使用している。多くの人が処理し、工数が多い業務はAAを使って効率化し、多種多様な個人化された業務ではPADを使用している。

社内利用を推進するためにバーチャル組織でRPA事務局が構築された。部門としては、RPAの運用体制の構築などを行うIT部門、RPAの効果を検証したり、教育を行ったりする業務改革部門の2つが存在する。この2つの部門があることでRPAの利用がより早く進んだ。

AAを利用する場合、RPAの概要説明を受けたり、e-learningを受講したり、ロボットを実際に作ったりして、確認テストをした後に利用開始できる流れになっている。一方、PADはセミナーなどの受講は任意。使い方としては、Pulse Secure<sup>※</sup>やExcelなど自社でよく使っているものとの組み合わせ方の説明を行っている。こうした動画は見逃し配信も行い、いつでも受講できるようにしている。

コニカミノルタはグループとして国内外に会社が存在する。グループ全体でRPAを広める体制を作り、各地域で核となる事務局を作るなどしてガバナンスを利かせたり、優先順位付けやライセンスの持ち方などの決定権を移譲したりして、効率的に推進している。

コニカミノルタではRPA事務局を立ち上げ、2017年から導入を推進している。2019年度までの3年間は、主にRPA活用への意欲・期待が高い部門から導入を進めた。日本での成功事例を足掛かりに、取り組みの輪はグローバルに広げ、2021年までにグローバルで約13万時間の創出に成功した。近年では次第に1つの事案で大きな効率化ができるケースが少なくなり、施策あたりの削減効果時間が縮小化している。そこで2021年には個人業務の効率化に向けてPADを展開し教育を推進。着実にユーザーを増やし、現在では国内社員の約30%に利用してもらうことに成功した。

## 【今後の展望】

自社内で教育体制、国内外でグループ企業における推進体制を構築していったが、全社に散らばるユーザーからの技術的な質問に答えるため、IHSの力を借りてユーザーに寄り添いながらきめ細かく対応することで顧客のDXを実現させていきたい。

※Pulse Secureは、Ivantiのセキュアアクセスソリューションです。

本件に関するお問い合わせ先：  
IIMヒューマン・ソリューション株式会社  
03-4333-1111 / web@iimhs.co.jp

## AOYUZU -Salon de Digital- 新春特別企画 講演概要

2023年1月25日開催「AOYUZU-Salon de Digital-」  
新春特別企画の講演概要をご紹介します。

日本マイクロソフト株式会社  
パートナー事業本部 第一アーキテクト本部  
クラウドソリューションアーキテクト  
曾我 拓司氏

モデレーター：  
出光興産株式会社  
執行役員 CDO・CIO デジタル・ICT推進部管掌  
三枝 幸夫氏  
IIMヒューマン・ソリューション株式会社  
関 マサエ

「現場DXを推進するPower Platform とその事例」と  
題し、日本マイクロソフト株式会社様から、  
Power Platformを活用されている3社の事例を紹介し  
ただいた。

### 【概要】

#### ■ 事例紹介

現在、DXが喧伝されているが、このデータが紙でなくデジタルだったらもっと活用できるのに、など、今迄もデジタル化への要求はあった。ただ、開発リソースが限られている中で、従来は投資対効果の高い課題のみがデジタル化されていた。しかし、残された課題も本当は宝の山で、内製化すれば大きな効果が出る。ガートナーは内製化の阻害要因として、IT要員の不足、育成の仕組みの欠如、開発スキルの不足、などを挙げているが、これらを解決するために、ノーコード／ローコードという道具が出てきた。Power Platformはその道具の一つである。以下、それらの道具を駆使して課題を解決した事例を紹介する。

#### 1. 日揮グローバル株式会社

入社1年目の社員が、「Punch Memo」という残作業管理アプリを3週間で開発し、業務時間短縮で約5億円の価値を創出した。Power Platformの中のキャンパスアプリを使用し、全現場で約5万件あるPunch（残作業要求）の確認作業を、50分から5分に短縮した。IT未経験の若手社員が短期間で開発したこと、業務をデジタル化したことが重要だ。

#### 2. トヨタ自動車株式会社

多くの社員にPower Platformを広げ、自らアプリを開発するに至った事例である。2020年1月に、マイクロソフトのイベントでPower Platformを見たトヨタの社員が社内にコミュニティを作り、草の根活動で広げた。2020年10月には情シスも関与、月1回ハンズオンセミナーを実施し、HPも開放した。その結果市民開発が進み、2022年9月で26000強のアプリ、6万強のAutomate Flowを作成した。自分たちの道具は自分たちで、という文化があるためかもしれないが、工場やオフィスの人が自分の業務を楽にするためにアプリを作っている。

#### 3. 東京地下鉄株式会社

市民開発者だけでは作れないような難易度の高いアプリを、プロ開発者と連携して開発した事例である。プロ開発者が部品をつくり、それを使って市民開発者がアプリを作っている。具体例として線路点検システムがある。従来、目検で行っていた線路の締結装置点検作業を、AzureのAIサービスとPower Platformを活用して効率化するアプリを開発した。撮影画像から点検の必要な装置を見つけるAI機能はプロが作り、市民開発者はそれを使ったPower Appsを作成、それをタブレットからアクセスして現場の点検をする、というものだ。

#### ■ Power Platformの概要

Power Platformはいくつかのサービスから構成されている。中心になっているのはDataVerseというRDB、それを核に現場での入力用のキャンパスアプリ、管理者用のモデル駆動アプリがある。この二つは社内ユーザ向けで、社外ユーザには、ポータルアプリがある。データ可視化のツールとしてパワーBI、ボットの会話ツリー開発用にチャットボット、学習済みのAI機能を使って業務をサポートするAIビルダーがある。クラウドフローはサービスとサービスをつないで業務フローを作成する。Power Platformはこれらの個々の機能を使うこともできるが、繋げることで業務プロセスの効率化を達成することができる。

本件に関するお問い合わせ先：  
IIMヒューマン・ソリューション株式会社  
03-4333-1111 / web@iimhs.co.jp